（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	劉　青
論文題目	中国養生思想の近世的な展開――朱権の養生思想を中心に――		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文（以下、本論文）は、中国近世における養生文化の東アジア地域への伝播と各地域での展開について、明の朱権の養生書を中心に考察したものである。その中で取り上げられた種々の技法、薬方に関する言説の典拠及び書承関係を明らかにし、朱権の編集意図と思想的特色をとらえた上で、それらが後世にどのように伝播したかを辿り、養生思想の近世的展開をも展望したものとなっている。

第一章では、先行研究の整理とともに1958年に発掘された「寧王壙志」の記述を新たに加えることで、朱権の記録を整理し、その生涯と社会的思想的な背景を検証している。朱権が養生思想に着目した契機について、申請者は、太祖朱元璋の藩王政策の精神性とその影響下での王府文化の発達を背景とし、その後の建文帝時代から現れ、靖難の変以降に具体化していく藩禁政策への転換によって、政治的な活動に著しい制限が掛けられた朱権の政治への失望にあると指摘している。さらに朱権の思想的変遷を辿る上で、彼の著作と見なされる一群について、先行研究に従いつつ目録類での再検証と実見調査を行い、『千頃堂書目』『列朝詩集小伝』の記述を加えて、新たな朱権著作目録を作成している。日本に伝来した朱権の著作についても、江戸医学館主宰の丹波元胤による『医籍考』の記述と、森立之らの『経籍訪古志』の考証の有無を照合し、伝存本の所在を確認しつつ、小島宝素の『河清寓記』の内容から、日本においても朱権の著作が受容されたことを指摘している。

第二章では、朱権の代表作と目される『活人心』『神隠』『寿域神方』の養生書三種のそれぞれについて、中国大陸・台湾・韓国・日本での伝存本の所在調査結果を用いて、諸本間の異同から本文系統を整理している。申請者は、『活人心』の伝本調査過程で、福井崇蘭館旧蔵書のなかに明刊本が含まれていることを見出し、寄託先の杏雨書屋において閲覧許可を得て実見調査を行っている。この福井崇蘭館旧蔵本は、伝存本の系統上最古本に位置し、しかも、それまで知られていた最古本である台湾中央研究院蔵明刊本が下巻の一部を欠く零巻であったのに対して、上下巻からなる完本であることを指摘している。新出資料によって本文系統を確定している。

また、『活人心』の上巻における「養生之法」「導引法」「保養精神」の記述は先行する『修真十書』からの摘録編纂であることを確かめ、朱権独自の言説は「中和湯」「和気丸」「治心」「補養飲食」の四章に限られることを明らかにしている。下巻の「玉笈二十六方」に収載された26種の薬方は、出典調査の結果、7種類が宋元の方薬書類から引用されているが、他19種については配合分量が異なるものも含めて、朱権独自の薬方と推定できると指摘している。これらの内容を精査した上で、朝鮮、日本での『活人心』の伝存本は上巻に異同は見られないが、下巻の薬方については朝鮮医学に基づく修正、あるいは各地域の植生に関わる代替素材への変更といった異同が認められるなど顕著な特徴があることも指摘している。

さらに『神隠』については、先行研究が指摘したように元代の『農桑衣食撮要』からの引用であることを再確認し、その独自性が薬方にあることを指摘している。記載された薬方が精神安定や軽度な傷薬の類であることから、農業従事者の日常生活に照らして、より実用的な書になっていると述べている。今ひとつの『寿域神方』は薬方書であって

内容的に常備薬というべき一群が掲載されており、疾病の診断と治療に関連して、道徳心や心の善悪といった記述があるほか、『活人心』を参照するようにとの指示があることから両書の関連が深いことを示しつつ、『活人心』からより実用的な側面を取り出し、普及させようとする意図が窺えるとしている。

第三章では、朱権の養生書の朝鮮、日本での拡がりについて考察している。朝鮮では『医方類聚』および李退渓の『活人心』手沢本、日本では竹田昭慶、曲直瀬道三、曲直瀬玄朔、舟橋秀賢といった医師、明経博士の著作から、養生思想の伝播の具体を記述している。朝鮮では医方全書『医方類聚』に朱権の著作が多数引用されている。一方、日本では室町時代末期から近世初期の曲直瀬道三の『広観摘英集』、舟橋秀賢の『導引纂要』、松尾道益の『養生俗解集』にやはり朱権の養生書が引用されている。ところが、室町時代末期の養生書にあって、曲直瀬玄朔の『延寿撮要』は、その内容から元代養生書の『三元参賛延寿書』を整理し平易に解釈したものと考えられるとしている。日本でも15～16世紀の比較的早い段階で元代の養生書が伝来していることから、後の朱権の『活人心』などの明代養生書を受容する素地がすでにあったことを指摘している。

従来、養生術は道家や伝統医学の影響を受けつつ、特に道教と神仙思想の接点として発達を遂げたとされてきた。それは「不老不死の体」を求める手段としての養生術であった。しかし、朱権の一連の養生著作をみると、それまでの医学的な「死」に対抗するための「仙薬」「仙術」「仙道」は、「精神安定」「万病不生」「長世久安」という生活の側へと展開し、人間の日常生活において人を活かしめる養生術が形成されていく。しかし、養生術が既存の神仙思想と対立するのではなく、神仙説と道教、あるいは医学が、「養生説」を一つの結節点として互いに統合されていくとみるべきだと述べている。このような観点からの養生思想史の再構築を目指し、それらを「展開」として記述できることを述べている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文（以下、本論文）は、中国近世社会に広く浸透した養生文化について、明の朱権が著した三種の養生書に着目し、そこに取り上げられた種々の技法、薬方について遡及的な考察を試み、著者の編集意図や思想的な特色を明らかにしたうえで、それらの著作がどのように後世に伝播したかを辿り、養生思想の近世的展開を探ろうとしたものである。

明の太祖の子息である朱権は明初の代表的な文人の一人として活躍し、多分野にわたる書物を著したが、とりわけ道教や養生術に強い関心を抱き、数多くの著作を残した。本論文では、明代養生書の先駆けとして知られる『活人心』に加えて、これまでほとんど注目されていない『神隠』『寿域神方』をも取り上げ、その養生思想を構造的に把握しようと試みている。考察の手法は、書誌学的な調査を行ったうえで内容的な特色を比較、検討し、著述意図を探ろうとするものであり、手堅く実証的である。また、三書に展開された養生、長生の技法や薬方に遡及的な考察を行い、典拠及び出典を特定している点が注目される。

本論文では、『活人心』上巻の養生法、導引法などの身体技法は、元代初期に編纂された『修真十書』からの抜粋であり、同書下巻の薬方集は、徐文中の『加減十三方』を増補した『霊秘十八方』からの転載であることを突き止めている。そして、明初にあっては、別々に扱われていた仙術（長生術）と仙薬（長寿薬、万能薬）を一書にまとめ、道教、仏教の修養法と医薬学とを結合させようとしたところに、『活人心』編纂の目論見があったとする。また『神隠』の下巻に論述する草木の栽培法、家畜の飼育法は元代の農書『農桑衣食撮要』に依拠することに着目し、隠者の生き方を説くだけではなく、養生の範囲を拡大して摂生の一般的な方法を論述し、農業、牧畜の農学的知識にも及んでいることを指摘している。ここから庶民生活の健康や繁栄を維持するための実用的な生活術を志向していたと結論づけている。一連の考察は実証的であり、示唆に富んでいる。

養生思想の史的展開において、先秦以来の神仙思想が生み出した煉丹術は、唐宋の間で丹薬服用の「外丹」から体内での金丹錬成の「内丹」へと変遷したことが道教研究者を中心に強調されてきた。ところが、明代の養生文化の形成において、一般庶民が実践する養生法、健康術へと世俗化していく流れがあり、そこに朱権の養生書が大きな作用を発揮したことを明確にした意義は大きい。不老不死、遷化昇天の秘術、秘薬は、庶民が身近に実践し、活用できる延年益寿、健康増進の養生法、長寿薬へと転換されたことが、明清の養生ブームを巻き起こす契機となったことが、これによって見通せることになる。

ただし、こういった動向は南宋末から元代にすでに胎動しており、養生術だけでなく、医薬、算術、天文暦術、農業技術などの科学知識全般にも指摘できる。したがって、そのような見地において、科学知識の啓蒙、普及を担った日用類書などにも論及すべきであった。

全体的な評価を下せば、本論文は元明の注目されなかった養生書を発掘し、新たな知見を多く見出しており、朝鮮、日本への影響も視野に入れた労作である。考察対象の養生書に展開された技法や薬方の具体的な様相をさらに吟味し、元明の宗教文化や医薬学との関連性をもっと掘り下げて議論する必要はあるが、東アジア地域の近世社会に開花した養生文化の思想史的考察という新たな研究アプローチを切り拓いており、今後の研究の進展が大いに期待される。

以下、各章の成果と問題点をあげる。

第一章では、朱権の生涯や著作を素描し、養生書を著した社会的思想的な背景を明らかにしている。文人としての朱権の人物像から、道教思想に傾倒した契機を捉え、そこに養生思想への着想という視点を導入しようとした点は評価できる。しかし、朱権の周辺の明初の文人サークルの活動や著述を幅広く見渡して、道教的な養生思想がどのような位置を占めていたのかをもっと検討する必要がある。

第二章では、朱権が著した養生書である『活人心』『神隠』『寿域神方』のそれぞれについて、伝存本の所在調査を丹念に行い、書名の変遷、テキスト間の文字の異同を整理することで、流伝の系統分けを試みた。これまでの研究では書誌学的な基礎作業が欠けており、印象批評に止まっていたが、申請者の研究は初の試みと言ってよく、大いに評価できる。とりわけ、『活人心』は、近年、宮内庁が海外流出を阻止するために購入した福井崇蘭館旧蔵書のなかに明刊本を見出し、寄託先の杏雨書屋において実見調査を行ったことが特筆される。なお、朱権の養生書は庶民生活での実践、活用を念頭に大衆化の方向性があると申請者は指摘するが、養生思想へと傾斜する朱権の動機との関連になお問題が残る。

第三章では、朱権の養生書の伝播について考察している。朝鮮については『医方類聚』、日本については室町時代末期の医師、明経博士が著した養生関連の著作を取り上げ、晩明の『遵生八牋』を中心としてなされてきた先行研究が見逃していた日本残存資料を活用しており、『三元参賛延寿書』『山居四要』などの元の養生書を発掘するなど、多くの成果が認められる。朱権の著作を手がかりとした限定的な考察であり、『遵生八牋』との比較、儒仏道の三教における修養論との関連性など検討すべき課題は多く残されているが、近世前期の養生思想の形成を描き出す基礎作業としては評価に値する。

以上、なお不十分とみられる箇所もあるが、総じて斬新な着想と大きな構想に基づいた好論であると判断される。本論文に示された新知見は斯界の発展に寄与するものと思量する。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和２年３月２５日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日 以降